第７回

薬草だより

ヨクイニンはハトムギを脱穀したものです。

樋口 剛央*

ハトムギ（提供：橋本竹二郎氏）

生薬名：ヨクイニン（薏苡仁）
薬用となるヨクイニンの基原植物：
・第十六改正 日本薬局方（2011年）
Coix lacryma-jobi Linné var. *mayuen* Stapf（イネ科）
薬用部位：種皮を除いた種子

ヨクイニンはハトムギを脱穀し、種皮を除いた種子です。形は産地により多少異なりますが、卵形～広卵形をしており、大きさは約6mm×5mm、腹面の中央にくぼみがあります。「ハトムギ」は主として食品（お茶、製粉、シリアル食品原料、雑穀米原料ほか）として活用されますが、「ヨクイニン」は漢方製剤などの医薬品原料として、また、近年では保湿、美白を目的とする化粧品原料としても活用されています。

ハトムギは、日本各地の水辺や湿気のある所によく自生するジュズダマの変種であり、栽培品種として畑で栽培される1年生の草本植物です。背丈は1～1.5m、葉は細長い披針形～広線形をしており、幅1.5～3cm、長さ30～60cmと幅広く、イメージとしてはトウモロコシを小型にしたような草姿をしています。花は8～10月に、雄花と雌花に分化して葉の付根に多数付きます。花には華やかさはなく目立ちません。果実は熟すると長さ約1cm、大麦をやや丸くしたような形をしており、外面は黒褐色～灰褐色を呈し、艶があり、細かい縦じまがあります。日本での収穫時期は9～10月で、10アール当たりの収量は200～300kgほどです。

ハトムギとジュズダマはよく似ていますが、ジュズダマに比べ、ハトムギの花序が垂れ下がっている点、果実の殻（苞鞘）が薄く指で割れる点で異なり、容易に区別することができます。また、それぞれの果実の持つ澱粉がハトムギは糯（もち）性で、ジュズダマは粳（うるち）性のため、ヨウ素試液による呈色がハトムギは赤色、ジュズダマは青紫色と異なることからも区別が可能です。

2011（平成23）年度のハトムギの国内流通量は約6850トン（輸入6000トン、国産850トン）であり、輸入元は主にタイ、中国、ベトナムです。中国の主な産地は福建省、遼寧省、河北省など、国内では富山県、栃木県、岩手県などです。

日本への伝来は奈良時代、江戸時代など諸説があり、また、中国より渡来したとされますが、形態だけでなく遺伝子的にも類似しているため、朝鮮半島経由であったとも考えられています。江戸時代中期に貝原益軒が編纂した『大和本草』（1709年）には「薏苡仁　功能多し上品の薬なり」と記載されていることから、この頃には薬として認知されていたことが確認できます。

ヨクイニンは、中国最古の本草書といわれる『神農本草経』（2世紀頃）に上品として収載されており、古くから薬として認められてきました。『本草綱目』（1596年）にはその効能に、利尿作用に通じる「湿に勝つ」とあります。しかし、これら中国の本草書には、イボ取りや美肌に効果があるという記載はなく、前出の『大和本草』に、顔面の多発性小瘡に煎服が有効であった例や、江戸時代の医学書にイボ取りが紹介されていることから、イボや肌荒れに対する効果は日本の民間療法によるものと考えられています。漢方処方では薏苡仁湯、桂枝茯苓丸加薏苡仁、麻杏薏甘湯、参苓白朮散、薏苡附子敗醤散などに配合されています。

健康食品としては、食物繊維が豊富に含まれており、便秘改善による美肌効果、利尿作用によるデトックス効果が期待されています。

＊松浦薬業株式会社